『歓喜の余滴』より抜粋

107

昭和二年二月二十六日

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、私程幸福な者がいるだろうか、人様は私の心の中まで知らないから、安心を六ケ敷く勧める様に思われるが、こんな境地に成ってくれればよいになア。何の障りも無く、何の苦痛もなく、何の疑念も無く、底より湧き上る法悦の泉には限りが無い。何と広大な親様だろう。法龍其の儘有りの儘、晴れられんで泣いた私に、疑いが晴れないから堕ちるのじゃ、堕ちるまんまと一体じゃぞと、声なき声に呼び覚まされ親が逢ってくれた時の大自覚、大決定、機法一体、仏凡一体の境地、疑い無き本願で生かされた時、逢うたのが証拠じゃもの、逢わないお方が百千万人総掛りで罵倒されても、信仰一つは私の自由には変えられません。それを言葉の先だけくつつく方は、疑いながらの往生じゃ、異安心じゃと騒ぎ立てるが、馬鹿でない限り実地に味わったら判るよ。

闇が去ってから明りが来るのじゃなかろうが、自分が晴れてから後に連れて行くお慈悲じゃなかろうが、明りが点いた時に闇が何処に有る。晴れられんから晴らすお慈悲に遇うた後、疑いが何処に有る。法龍の心、叩けども叩けども妄念は息まず、この心を貫く御親のましますを思えば、この身が正定聚の分人ではないか、南無阿弥陀仏。

109

昭和二年三月三日

願力の不思議を仰ぐ時には敵はいない、心の底から打明けらるる同行は甚だ尠いが　今日は非常に愉快であった。こんな事は滅多にあるまい。合点したのは宗教ではない。凡夫の魂と仏の魂とが合致した時が　信の一念の時じゃ、知るじゃの知れんじゃの　親に遇わない者ががやがや言ったって　此の境地だけは等覚の弥勒様でも伺い知れないのじゃもの　何の理屈で通れ

ようかい。　実地に遇いさえすれば親と一体、明信仏智、　久遠劫からの苦悩が抜き取られたのじゃもの　知らなくてどうするか。

112

昭和二年三月八日

広大な親心、私一人が救われて行く。　親鸞一人が為なりけりとの味が沁々と味われる。　大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬればの味は　無碍の信仰の前に展開する境地である。　嬉しいなア、疑いなき本願に救われた事を慶び讃えずには居られない。

113

昭和二年三月十三日

金は有っても死ぬ迄じゃ。無形の財産は地震にも火事にも水難にも遇わない、今現に広大な親心に生かされていながら　お金を貰った程にも思わないが、何とあきれた魂ではないか。

116

昭和二年三月十七日

よく参って下さる。真剣に求めて下さる。叫ばずにはいられない。

南無阿弥陀仏の仏は私と一体。

117

昭和二年三月十八日

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、彼仏今現在成仏、法龍称念必得往生、心は茲に南無阿弥陀、煩悩動けば南無阿弥陀。何と言う広い世界であろう。

１１８

昭和二年三月十九日

広大な親心に遇うたものじゃなア、叫ばずにはいられない。説教の最後に五日間説教さして戴きましたが、皆様に聞かしたのではなく、私が親に巡り遇うた事を喜ばして戴いたのでございますと言った。この信念はじっとしていられない程有難い。嬉しいなア、楽しいなア、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、広大難思の慶心じゃ。

１１９

昭和二年三月二十三日

波は立っても底は静か、感情は動いても自性は動かぬ、成程と合点はしても実機は承知せぬ。聞かぬ機を聞かすのが仏智の不思議。

１２０

昭和二年三月二十五日

倒れる迄進め、広大な親の念力は法龍の全身に体得しているのである。聞き抜く迄聞かせよ、仏智の不思議は一切の疑網を截ちて一切の志願を満足せしむるのである。散り乱れる心の有りたけが南無阿弥陀仏と一体じゃ。

１２１

昭和二年三月二十七日

官舎の方面にも中々熱心な求道者がいられる。熱心でなければ得られない、道理理屈を知ったのでは行かれない。覚えたのが役に立たぬ、信じた力があてに成らない。何にもわたしのは間に合わない仏智不思議の親心一つ。唯の唯じゃなア、ああ楽し、ありの儘の法龍が、立っても坐っても南無阿弥陀仏、私が弥陀やら弥陀が私やら、この身に成して下さったお母様は仏様

の御化身じゃ。

122

昭和二年三月三十日

余り参らぬ同行が私の話を聞いて、教行寺には妙な事を言う坊主が出来た。俺等は極楽に楽しむ為に参ろうと思って聞くのに、安気にしていられない、此の世に直に出て来るのじゃと言ったが、あんな事はもう聞くまいと言ったそうなが、大慈悲を獲た者がじっとしていらるるか、苦悩を苦悩と知らない衆生を見た時にじっとしていらるるか、極楽から日帰りじゃ、よせかけく帰らんにおなじじゃ。

123

昭和二年四月五日

午前九時第三回石橋さんで法話、午後一時より谷口さんで、四時頃より芳賀さんで、夕方から中路さんで法話、私が懈怠じゃで同行が催促に来て下さるのだ。又広大な親心を貰って見れば悶える者を救うのが一番愉快なのである。底の知れない煩悩の有りたけが南無阿弥陀仏じゃもの。

125

昭和二年四月十六日

広大なお慈悲は底が知れない。
仏智の不思議は理屈が合わない。
払えども妄念煩悩には限りがない。
私は仏の一人子だからじっとしていられない。今日一日を無事に済まさして戴いた事を感謝せずにはいられない。仏様の御

恵、両親の念力、一切を拝まずにはいられない、南無阿弥陀仏。

128

昭和二年四月二十日

救われた尊さ、生かされた嬉しさ、体験の叫びは何時も初花。

129

昭和二年四月二十一日

如来様の念力は強いなア、法龍の現在の儘が正定聚の菩薩と言う自覚を与え、而も其の上に他の苦悩の人々を同じ証まで引入れる威神力を与えて下さったとは。

仏とは自覚覚他覚行窮満に名づける、仏の自覚の念力が覚他と動いて、私が機法一体、仏凡一体の自覚を得た。そして又他を覚らしめようと覚他が動く。これが寄せかけ寄せかけ帰らんに同じの念力である、元に帰せば若不生者の誓願力である。

131

昭和二年五月十日

同行同志は何故こんなに心から親しいのであろうか、自分ながら判らない、尽未来際までの兄弟だからだろう。

132

昭和二年五月十一日

午後一時から夜まで　引続き説教さして戴いた。熱心に聞いて下さる同行が多いから楽しい、自分が話して自分が喜ぶ愉快さは喩えるに物がない。嘸々親様はお慶びであろう、一人息子が達者でこんなに働いているから。嗚呼、法味楽法味楽、無形

の財産には限りがない、隔てがない。損じもせぬが破れもせぬ。増しもしないが減りもせぬ。凡夫一杯が仏一杯、不思議な本願じゃなア。

133

昭和二年五月十二日

凡夫には決定心が無いとか、喜びは続かぬとか、はっきりした事はないとか、暗いままとか教える人が多いが、可愛想なものじゃなア。如来の至心に廻向し給える念力が、私の疑蓋無雑の大安堵心じゃに、決定心がなくて何とする。行者正しく金剛心を受けると有るではないか。　仏智半入で貰い物の尠い者には慶びも続くまいが、広大無辺の仏智に遇うた私は　思い出す位でなく忘れられない、何故か、それは煩悩が動き通しであるから　常に仏様と一体に動いている。憶念の心常にして仏恩報ずるおもいありである。　理屈を知っただけで体験もなければ実感も無い人が節や喩話を信仰の全部の様に心得て、はっきりした事は無いと教えるが、正直

134

昭和二年五月十三日

午前中　宇島の同行が二人道を求めに来られた、真剣味が足りない、生死の岸頭に立った人でなければ十方世界は唯で貰えない。

135

昭和二年五月十四日

本願に遇わして戴いた事を慶ばずにはいられない。広大難思の慶心を得さして戴いた今は大慈悲の鴻恩に泣かずにはいられない。死んでから先の御浄土も恋しいが、現在の一息一息が大悲の願船に乗って光明の広海を走っている姿ではないか。現在救われていない者が、死んで救われると言う事は当てに成らない。信の一念の時信楽開発して正定聚の菩薩に成っていない

者が真実報土に出らるるものか。嗚呼、妄念乱想の有りたけ、貪瞋邪偽の有りたけが真実の御親に救われて、私が弥陀やら弥陀が私やらの境地に不思議不思議の他はない。救われた嬉しさには称えずにはいられない、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

昭和二年五月二十五日

137

喜び得ない心が出て尚更喜ぶ。

よい親を持ったものじゃなア。

昭和二年五月二十七日

138

お称名を称えずにはいられない、何と広大な親心だろう。　私は六字を吸込み六字をはき出して生きている。悪龍の私が親を親と知らして戴く迄にはどれ程の御心を痛めた事であったろうか。どれだけの血汐を注がれた事であったろうか。私がうんと言って上げなければ　若不生者の誓は丸潰れ、うんと言わされたのも如来様の念力からだけれど。